吉田、伊調姉妹支えた医師

三井石根氏

視力アップで金だった

北京五輪女子レスリング

北京五輪で金2個を含む計4個のメダルを獲得した女子レスリング日本代表の陰に、偉大な〝縁の下の力持ち〟が存在した。55キロ級金メダルの吉田沙保里（25＝綜合警備保障）、48キロ級銀の伊調千春（26＝同）、63キロ級金の伊調馨（24＝同）の視力矯正を手掛け、北京に同行してバックアップした三井メディカルクリニック（東京都港区）の三井石根院長が19日、本紙の取材に驚異の視力回復秘話を語った。

3人が訪れた際、三井院長と手を合わせた。右から吉田沙保里、伊調千春、馨

コンタクト外れる不安払拭

三井院長と3人の出会いは、今年1月にW杯で吉田の連勝が119で止まった直後。以前、吉田や千春が試合中にコンタクトレンズが外れて苦戦したと伝え聞いた院長が、自ら電話して協力を申し出た。

同クリニックでは、就寝中に特殊なコンタクトレンズで角膜を癖付けする「オサート」という視力回復法を手がける。三井院長は国内での第一人者だ。これまで視力回復を希望しながら、レーシック等のレーザーで角膜を削る手術をちゅうちょしていた3人は、喜んで受け入れたという。

レスリングは頻繁にルールが改定され、最近は試合中にコンタクトレンズが外れても、はめ直しにくくなった。

「一瞬で視力が格段に落ちるので、遠近感が合わなくなる。これでは試合にならないので、皆不安を抱えていたと聞いた」（三井院長）

だが吉田は2月末の治療開始以来、わずか10日余りで右0・1、左0・08が右1・5、左1・0に、馨は右0・15、左0・2が右0・8、左1・0に回復。ただ、一番視力の悪かった千春だけは回復の度合いが遅く、右1・0、左1・0に回復したものの、完全な状態ではなかった。

くしくも、目の状態と比例するように吉田と馨は金、千春は銀。14～18日まで北京に滞在し、3人を見守った三井院長は「千春選手が一番近視が強かった。視力は運動選手のパフォーマンスに大きな影響を及ぼすので、もう少し早くから治療をし、もっと頻繁に診療できていればと悔やまれるが、ハンディを背負いながらも本当に頑張ってくれた。直前練習では驚くほど厳しく己を鍛えており、完全燃焼したと思う」と振り返った。

現地では吉田の両親から「娘がすごくよく見えるようになったと言っています。ありがとうございました」と感謝され、女子全日本チームの栄和人監督（48）からは「この治療法をぜひもっと多くの種目の人に広めてほしい」と声を掛けられたという三井院長。「吉田選手に『金メダルをかじらせて』と言ったら、やんわり断られた（笑い）。それはともかく、私が金メダルに少しでも貢献できたとしたら光栄」とはにかんだ。（坪野忠彦）

吉田は10日で右0.1から1.5に

驚きの矯正術「オサート」とは

オサートは米国で開発されたオルソケラトロジー（角膜矯正療法）を、国内に持ち帰った三井院長が進化させ、強度の近視や乱視、遠視も改善できるようにした画期的治療法。特殊なコンタクトレンズで就寝中に角膜を癖付けするので、メスを使わず、外せばやがて視力が元に戻るので安全だという。

「視力だけで夢をあきらめざるを得ない若者を、一人でも多く救いたい」との思いから、一流アスリートをバックアップ。プロ格闘家の山本〝KID〟徳郁（31）、大リーガー松井稼頭央（32）、プロゴルファー湯原信光（51）や、パイロット、競馬騎手、ボクシング選手などの視力を回復させてきた。